



写真と文：足立 攝

# 大分県 現代俳句協会 会報

128/129合併号

令和5年8月31日

## 現代俳句歳時記 【凌霄花（ノウゼンカ）】

凌霄花と書いてノウゼンカ、ノウゼンカズラと読むが、俳句では単にノウゼンと読ませることも多い。中国原産の落葉性つる性植物で赤やオレンジの大きな花が特徴。日本には平安時代に渡来した。

裁かれるものでのいる午後のうぜん花 中山宙虫



6月10日土曜、九重のやまなみ牧場で大分県現代俳句協会主催の吟行俳句大会が開催されました。第19回大会を豊後大野市三重町で開いて以

# やまなみ牧場に六十名 第20回大分県現代俳句協会吟行大会

来、4年ぶりの開催になります。地元実行委員会には赤峰佐代子会長、桐野力（土屋粒勝）事務局長のもと、高原句会、さくら草句会、わいた句会の有志が委員として参加しました。

今年5月29日に例年より早い梅雨入りを迎えて天気心配されましたが、当日は奇跡的に晴れて、参加者は初夏の牧場吟行を満喫しました。

会場には河野輝輝顧問、河野則子副会長もかけつけ、現地を中心に60人が集まり盛会でした。特別選者が選考の間、足立幹事長がプロジェクトを使って「俳句の入口」と題した講演を行いました。講演後の質疑応答では「季語はなぜひとつ」「中七は絶対七音でないといけないか」などたくさん質問が出ました。

大会では投句総数74句で、一席の大分市の東圭子さんほか合計18作品が入賞。賞状のほか、副賞として地元のお米や、椎茸、牧場の年間パスポートなどが授与されました。

# 第20回県協会・吟行俳句大会inこのえ《受賞作品》



赤峰佐代子大会会長から賞状を渡される大分市の東圭子さん。

【第20回吟行俳句大会実行委員長賞】  
(大会一席)

ひつじの群ほどけて夏の雲となる

東 圭子

【優秀賞】 (二句)

行く雲や羊を追った夏帽子

豊國 隆信

高鳴れる吾も夏野の一人なり

幸谷 恵子

【優良賞】 (五句)

梅雨晴間ポニー引く子の余る綱

志賀 文子

梅雨晴れや牧場に残る赤い傘

桐野 力

草原のカメラの射程に馬を置く

河野 則子

牧場の梅雨はおおらかじゃんけんば

足立 攝

やまなみ圏縁深まる田周率

原田 勝子



桐野力(古後粒勝)大会事務局長

【選者賞】 (八句)

〈高原句会代表・甲斐加代子推薦〉

千町の青田波打つくじゅうかな

甲斐 素純

〈わいた句会代表・竹尾友彦推薦〉

時の日や記憶を刻むやまなみに

南雲 玉江

〈実行委事務局長・古後粒勝推薦〉

牧場を万緑の風きげんよう

赤峯 友子

〈真現俳協顧問・河野輝暉推薦〉

高原の余白に馬の人参食む

河野 則子

〈真現俳協副会長・河野則子推薦〉

鴨群を日傘に翹う雨蛙

足立 章

〈吟行俳句大会・東圭子推薦〉  
夏薊何事も無く咲いている

赤嶺 広史

〈真現俳協事務局・足立町子推薦〉  
高鳴れる吾も夏野の一人なり

幸谷 恵子

〈川添俳句教室代表・赤峯友子推薦〉  
ひつじの群ほどけて夏の雲となる

東 圭子

【九重町教育長賞(時松栄子)】  
杖つかぬ若さをひろう夏野かな

河野 輝暉

【やまなみ牧場社長賞(安部政広)】  
残り鳴九重の谿に噓く(ちちすすく)

菅 勲

## 第二回 雑詠句会作品募集

◇残暑、または秋の句(3句)

を募集します。同封のFA

X用紙、ハガキ、メール等

でお送りください。

◇締切は九月二十七日(水)

まで。

◇詳しくは同封の句会報22号

をごらんください。

◇新会員も遠慮なく。

## 第25回 大分県現代俳句協会賞

# 鎌倉真由美氏「夢二の女」

## 敢闘賞に吾亦紅氏「父」と本田圭子氏「大根の二短調」

順位	応募番号	タイトル	作者	有村王志	河野輝輝	上田たかし	伊藤利恵	河野則子	中山宙虫	各賞	合計
1	8	夢二の女	鎌倉真由美		5	5		3	4	協会賞	17
2	1	父	吾亦紅		4		3	5	2	敢闘賞	14
2	12	大根の二短調	本田圭子	2	4	2	3		3	敢闘賞	14
4	9	コスモスの空	小野みち子	4	2		2		3	奨励賞	11
5	6	平和へ	白土正江	5		3	2			奨励賞	10
6	7	雉子車	牧野桂一				5		3		8
6	10	わたしだけ	陣野千恵子			4		4			8

平成3年（1991年）にスタートした大分県現代俳句協会賞は、途中6年の休止期間がありました。今回で25回目を迎えました。

この賞は当協会が一番権威のある賞であると同時に、当協会の目指している俳句の方向性を協会の内外に指し示すものです。

また協会の会員構成比で新会員が半数を占めているという現状の中で、この賞の「教育活動の一環である」という側面が重視されています。

選考委員には昨年より河野則子副会長が参加し、今回からさらに中山宙虫氏に加わりました。選考委員長は有村王志会長です。谷川彰啓顧問は選考委員を辞退しました。

今回は協会賞初応募の新人から、すでに評価の定まった経験豊富な俳人まで総数12名の応募がありました。事務局で応募順に清記（活字化）した「応募作品集」を、作者名を伏せ

た状態で各選考委員に送りました。

集計の結果は上の表（二部省略）です。最近では応募者の実力が拮抗し、優劣の差はほとんど選考委員の好み

の差といえるほどです。これは俳句の多様性を尊重する当協会の理念とも合致します。しかしそのことは些細な表記の癖や、表現上の完成度で

順位が入れ替わることを意味します。応募者には時間をかけた徹底的な推敲がのぞまれます。

各賞については選考委員長と事務局で協議し、一位の「夢二の女」は、選考委員6名中半数の3名が一席に推していること、二位と3点、三位と6点の得点差をつけていることなどの点で、協会賞候補としました。

同様に敢闘賞候補2名、奨励賞候補2名を選び、これを各選考委員に諮ったところ「異議なし」「選考委員長に一任」との回答を得て、正式に決定しました。

事務局から選考委員の先生方へお願いした内容は以下の通りです。

○十二作品中、最大五作品を選び、その順位をつけてください。

○持ち点は各選考者最大十五点で、一作品に振る最高点は五点とします。

協会賞に値しないとされる作品に五点を振ることは避けてください。

持ち点を使いすぎる必要はありません。

○選考の際は、一句一句の出来映えのほか、タイトルを含む作品全体の完成度にもご留意ください。

○協会賞の水準を保つことは必須ですが、力をつけてきた新人に「大分県を代表する先生方に、自分の作品を評価してもらえぬ絶好のチャンス」という勧誘をしています。応募者は間違いなく明日の協会を背負うことになる人材です。選評の際は応募者のやる気を削がないように、十分ご配慮ください。

○できれば全員にアドバイスをお願いします。本人だけに必要なことは、事務局が責任を持ってお伝えします。

○最高得点作品が自動的に協会賞になるとは限りません。選考の結果に基づき、選考委員の合議を行った上で受賞を決定します。受賞者なしもあり得ます。

（要約）

# 第25回大分県現代俳句協会賞・受賞作品

## 『夢二の女』

鎌倉真由美

## 受賞のこぼし

鎌倉真由美

寒紅や耳たぶだけがまだ熱い  
 背徳の柚子湯に白き胸放つ  
 とがった目の少年兵の冬帽子  
 少年の手話の指先から芽吹く  
 風花や人鋭角にすれ違う  
 行く秋を軽トラで追う男たち  
 稲刈のたかぶり解かすしまい風呂  
 濁り酒二口目から女です  
 いつまでも甘え上手な秋桜  
 フラフープすとんと釣瓶落しかな  
 サングラス外して。パパの顔になる  
 背中まるごと抱きしめられて草いきれ  
 昼顔やすらすらと出るほめ言葉  
 愛のない風船だからすぐ逃げる  
 八割の嘘に溺れる熱帯夜  
 駄菓子屋の奥に住みつくと風車  
 結局は門外す臍の夜  
 春シヨールふわり誰かが不倫する  
 梅どきは夢二の女が抜けてくる  
 注連飾外しカレーの日に戻る



第25回大分県現代俳句協会賞を戴きましたこと、選者の先生方に心より感謝申し上げます。有難うございました。大きな賞を戴く事が初めての経験ゆえ、ふわふわと実感のない感覚で、総会の受賞式に立ちました。参加者の真剣な視線を背中に感じた瞬間、自分なんか表彰されているのだろうか、ゾゾツとするような緊張感に襲われました。司会者からの指名で受賞の感想のマイクを握ったものの、何を話したのか覚えていません。ただ地元の狩野句会の方々に出たいと思いました。私が狩野句会に入会してはや10年が過ぎました。季語も知らなかった

中、上田たかしさん、攝さん、町子さんに支えられ、教え導いて頂きました。気がつけば俳句が唯一無二の生き甲斐となっていました。自分の句柄を云々する程の実力はありませんが、以前より恋する者の情感、もう少し言うなら品格のあるエロスを俳句で表現してみたいと思っていました。なかなか実現に到っておりませんが、今もその思いに変わりはありません。しかし、多分格式ある伝

## 【大分県現代俳句協会賞・敢闘賞】

『文』

吾亦紅

冬の雨濡らして上がる父の墓  
 振り向けば父と帰った月の道  
 厳冬の巖に凍み付く磨崖仏  
 喉仏ごとりと冬の怒涛かな  
 父の血を濃く引き継ぎて冬田打つ  
 冬の雲父のその後を聞いてみる

## 『大根の二短調』

本田 圭子

初めての眼鏡はカルティエ花大根  
 縄跳びの少年風になる途中  
 うららかや手帳に挟む水の音  
 芍薬の「耐える幸せ」なんてふふ  
 夕暮れの蟬は脱皮に忙しい  
 大根がほどよく煮える二短調

統俳句の先生からは「とんでもない。こんなの俳句じゃない」と叱咤されるかもしれません。

私は現代俳句の持つ自由闊達な、それでいて中心に诗情がある作品を念頭に置き、今後も自分の思う俳句を探索していきたいと思っています。狩野句会の句友に力を貰いながら、もっともっと精進していかねばと、受賞を機に決心しております。本当にありがとうございます。

## 【大分県現代俳句協会賞・奨励賞】

『コスモスの空』

小野みち子

寝ころべばそこがふるさとねじり花  
 もう風を操っている夏つばめ  
 浜木綿の影まで白きわが母郷  
 蟪蛄もわたしも空に繋がる  
 秋寒し針持つ指が老いてゆく

『平和へ』

白土 正江

寒夕焼波のむこうは戦の火  
 夏没日やさしき夫の別の顔  
 生きているハイビスカスの長き舌  
 秋没日サンゴは青い息を吐く  
 障子貼る二人の影も老いてゆく

(事務局抄出)

# 第25回大分県現代俳句協会賞・各選考委員選評

六人の選考委員から事務局に届いた選考結果と選評を発表します。作者名は伏せてありますので、各作品の作者名はあとから事務局で書き加えたものです。（到着順）

## 「夢二の女」を推す

河野 輝暉

夢二の女（鎌倉真由美）一位五点

いわゆる巧い俳句には概念が表出し易い。この全句群には具体物を忘れることのない情念がある故に読者を引きつけている。例えば背徳、と

抽象に、柚子、の具象がある。同様に、ほめ言葉に、昼顔と、等の二例を引用してみた。草田男は「俳句は具体的叙事を主として、内的要素の構造的二重性が欠落しては、俳句は工芸品たり得るとも文学とはなり得ない」と言っている。引用文が長いがこの事は他の全作品を検討する基でもある。

「夢二の女」は日常を忘れていないユーモア、機智で楽しませてくれる。題も作品のうち、と言われる点では、夢二の一句のために二十句がオールドファッションに支配されるので注意する点では、と思う。

大根の二短調（本田圭子）二位四点

美しい近代的な諧謔の作品が多く、好感度の印の二重丸が5つ付いた。

一位と二位は互角の力で戦ってきて困るくらいだった。

・言い訳をぐいと飲み込む寒の水  
・うららかや手帳に挟む水の音  
・ポケットは混み合ってます秋の雲  
などに代表される飄逸軽妙な作意の閑麗なりズムが立派。但、次句については検察に意味があろう。

・芍薬の「耐える幸せ」なんてふふ  
「の乱用は今後、慎重に。下五の「ふふ」は坪内稔典の作品と重なり技巧が透けてデジャブが見られる。兜太は大分講演の中で、俳句にも和歌の本歌取りは認めるべし、と言ったのは違和感が自分に有った故に記憶している。「おくのほそ道」（芭蕉）を読むと、西行や中国の李白や

杜甫などの漢詩文からの引用、背景の借用が詩文に散りばめられ教養の広さを感じる。賛否両論をこの際併記してみた。諸賢のさまざまに検討を欲する。

父（吾亦紅）二位四点

協会賞応募作品の力量に十分達している。ただ、明暗についての印象が全体構成としては片寄っている難点がある。例えば語句で言うところ、墓、

厳冬、霊柩車、認知症、限界の村、忌日、無人駅、など。題目が「父」の回想文でテーマに統一された懐古作品なので当然だとも思うが、協会賞

賞の性質上は多角面の視野からの各作品群という形がよいのでは。敬慕せし父との思い出は尽きないところ十分な技量が察せられ、この点は肯定できる。

- ・喉仏ごとりと冬の怒涛かな
- ・目の高さ風の高さの冬木の芽
- ・冬の雲父のその後を聞いてみるなど魅力を誘う秀句。今後とも邁進の甲斐ある手応えが十分。人生の寂寥感もある。

コスモスの空（小野みち子）四位一点

日常語で散文調になりがち、というのが全体的な印象であった。俳論、評価は実に難しいもの。この同じ印象が評者によつては推賞する根拠にもなるからだ。これだけの水準に到達していれば己の個性の、かつ自由闊達な俳句へと発展していくに違いないと信じる。

- ・螭螂もわたしも空に繋がれる

## 拮抗した作品群

今回の応募作品はなかなか拮抗しており、今年も推薦順位を点数として順位をつけることとした。一位の

五位句と五位の一点句までの間に大きな差はなかったことを、まず述べ

## 有村 王志

ておきたい。

一位・五点 平和へ

（白土 正江）  
寒夕焼波のむこうは戦の火

茎立つや戦火の中で生まれし子  
月おぼる海へたらたら汚染水  
夏没日やさしい夫の顔  
障子貼る二人の影も老いてゆく  
全体に語彙の豊富さ、素材の多様  
さ、季語の配置、映像の切れ味などに  
優れていた。

二位四点 コスモスの空

(小野みち子)

寝転べばそこがふるさとねじり花  
桑の実を夕日に染まるまで食べる  
もう風を操っている夏つばめ  
母が来て色なき風の中にいる  
全体にやわらかい诗情に溢れた句  
群で、理その意味での立ち位置がよ  
く分かり、好感を持った。

三位二点 マスカットの余白

(神 慶子)

幸せのところに石路の花  
芸をしてまなこ淋しき春の象  
倦める日はいちにちを蟻をみていたり  
小春日の幸せそうな洗濯物  
しっかりと自分の想いを表出して  
いる。自己投影ができています。

四位二点 大根の二短調

(本田 圭子)

冬の雨少しはずれた母のうた

縄跳びの少年風になる途中  
芍薬の「耐える幸せ」なんてふふ

五位一点 自由という身

(佐々木 玉)

## 春夏秋冬の構成に再考を 中山 宙虫

一位四点 「夢二の女」(鎌倉真由 美)

タイトルの持つ世界観でうまく揃  
えられた二十句。無理なく読み進む  
ことができた。無理のない文体をう  
まくいかし、さらりとした情感が心  
地良い。しかし、春夏秋冬が入り乱  
れる展開がその心地よさを消してい  
るのが残念だ。

行く秋を軽トラで追う男たち

背中まるごと抱きしめられて草いき  
れ

梅どきは夢二の女が抜けてくる

二位二点 「雉子車」(牧野 桂二)

やや硬質な作風が面白い。意外性  
から産み出される诗情も充分。題材  
の幅も広く、小さくまとまらない世  
界観を楽しませてもらった。それが  
故に、「雉子車」「ムツちゃん像」  
「かつぽ酒」など新鮮味を覚えない

自由という身のありがたさ大青野

受け流すことも大切猫じやらし

蛇穴に入るや願いを抱え込む

四位の芍薬の作品及び五位の自由  
という表現に今後を期待したい。

句の存在が惜しい。

陽炎の汽水を昇るピオトープ

原潜の入る日はタンゴ草矢打つ

クレヨン冬日に折るる拒食症

二位二点 「コスモスの空」(小野  
みち子)

文体が心地良い。無理のない作品  
作りに共感できる。郷愁を誘う内容  
で統一された世界観が読者を安心さ  
せるに違いない。「桑の実」「アカ  
シアの雨」などのどこかで使用され  
たフレーズや感覚を持つ句に目が行  
くのがもったいない点。

ミシンの目大きく逸れる春の雪

雨の日は雨の気分のレース編む

夏座敷亀のキーコもみんないた

二位二点 「大根の二短調」

好感を覚える二十句。柔らかな情

感が全体を包んでいる。それから見  
える小さなドラマがいい。口語調の  
作風がその柔らかさを作り出して  
いるのだろう。これまでにない発見の  
ある句が欲しいところだ。

うららかや手帳にはさむ水の音

二冊目の句帳は強でしめくくる

大根がほどよく煮える二短調

五位一点 「父」(吾亦紅)

父とのつながりを丁寧に描く骨太  
な世界。好感を持つ。二十句が「父  
の墓」から始まり、「父のその後」  
まで過去・現在・未来へと良く構成  
されている。しかし、全編のほとん  
どが冬の句、春夏秋冬をきちんと描  
ければ世界観が広がり生き生きとし  
た父も描けたのではないか。

喉仏ごとりと冬の怒涛かな

伝来の三反五畝の畔を焼く

父の血を濃く引き継ぎ冬田打つ

以下選外コメント

「自由という身」(佐々木 玉)

無理のない作風が好感。素直な表  
現である。作者自身を投影させなが  
らのもの。二十句を力みなくすんな

りと読ませるところに魅かれる。ただ、季語を含めて、予定調和な句が目につき、損をしているのではないか。

首筋を撫でる秋風焰魔堂  
声帯を固く閉ざして蚯蚓鳴く  
旧姓の表札濡らすばたん雪

「平和へ」（白土 正江）

ロシアのウクライナ侵攻から始まる二十句。あわせて夫との日常や世界に広がる不安を連ねて頷く内容である。句を詠んだ時期の問題だろうが、冒頭五句がウクライナ。中途半端な作品群となってしまうている。

寒夕焼波のむこうは戦の火  
月おぼろ海へたらたら汚染水  
夏没日やさしき夫の別の顔

「心の鏡」（大神 愛子）

日常を丁寧を描いている点が良い。予定調和が否めない。

「菊日和」（原田 勝子）

冒険しようとする意欲が見える。それ故か言葉の詰込みや性急さになる。

「秋の晝道展」（安森 範明）  
平穏な日常と旅情の句群。題材の多くは過去に目にしたことのあるものなの惜しい。

「わたしだけ」（陣野千恵子）  
作品の並べ方が惜しい。作品は充

## 「雉子車」の圧倒的うまさ 伊藤 利恵

一位五占 「雉子車」（牧野 桂二）

完成度の高い句の連なりと私小説風の構成とに引き込まれた。

粽解く 童話の里の雉子車

珍珠町の雉子車であろうか。子供の成長を願う郷土玩具の、珍珠町のそれは、彩色がなく素朴でしつかりとした造形美を持つ。この作品をタイトルに据え、行きかう季節を、こども（孫とおぼしき）を遠く近く眺めながら暮らす主人公（あるいは作者）の日常が丁寧に描かれている。

陽炎の汽水を昇るピオトープ

二十句の初めに置かれたこの繊細で美しい作品から、私は勝手に主人

分業しめる。春夏秋冬を意識したい。

マスカットの余白（神 慶子）  
すつと読める作品群。はぐらされているような句が多く深く入って来ないのが難点か。

公を女性と決めつけてしまった。そしてその後展開される、こどもと主人公の距離感の節度に、私より少し上の、全共闘世代のハンサムウーマンの手になるものと想像した。

ほうたるのまたたき聴けり難聴児  
ゲーム機に群れなす晩夏影を縮め  
クレヨン冬の日に折るる拒食症  
学校に行くか行かぬか室の花  
子と踊る障子明かりの指狐  
帰国児の聖夜に揚げる麵麴の耳

しかし二度三度と読み返すうちに、その思いは変わってきた。

暴れ川母系に染まる上り鮎  
曼殊沙華飽食の腹突き出して  
御神楽の真夜は猥らにかっぽ酒

等の作品はやはり男性の手になるものである。ジェンダーが俳句鑑賞の一要素となるのかもしれないのか、あまり深く考えたことはないが、ミューズの神は、女性的な感性を備えた男性作家にしばしば微笑むように思う。

もう種を採らぬと言つて種を採る

佳句ばかり並ぶ中で、特にこころ惹かれたさりげない一句。私は土に触れられない体質なので、植物の生育についてほとんどなにも知らない。

「種をまく」ことではなく、「種を採る」ことに始まるのだと教えてもらった。願わくは主人公が来年も「種を採る」つてくれますように。

月欠けて地軸が狂う詩人の死

一詩人の死は主人公にとって、満月を欠き、地軸を狂わすほどのものだったと言う。大きな熱量をもつ詩人がいたのだろう。そして主人公はその熱にふれたのだろう。たぶん

「詩」は、詩人の死をもつて完結したのだろう。もしかしたら、それだけの「ねつ」を持って詩に向き合っているかと、自他に問うているのかもしれない。抄中、この句だけ、身

振りが大きく少しトーンが違うが、この破調に魅力を感じた。いくつかの「問い」をくれた「雉子車」を一位置に推す。

二位二点 「父」 (吾亦紅)

ああいいなあ、ああいいなあと呟きながら読んだ。

作品「父」に於ける主人公は、作者とイコールだろう。もう若くはない男が、手放して死んだ父を恋うているのだ。「植木市父と来ていた肩車」「振り向けば父と帰った月の道」「認知症この世に父の冬帽子」等、まだ十分に作品化されていない句も散見されるのだが、

冬うらら影の素足をつつく鳩

喉仏ごくりと冬の怒涛かな

下駄の音近づいて来る霜の朝

目の高さ風の高さの冬木の芽

といった詩情のある作品の中ほどよく混じりあっていて、全体として清潔感のある仕上がりとなっている。

石路の花父の忌日を近くする

誰よりも父の癖継ぐ冬霞

伝来の三反五畝の畔を焼く

冬の雲父のその後を聞いてみる特別に相性の良い父子であったのか。葛藤は年月が漉したのか。いずれにしても、今は佛の座に居られる

方に、この世の作者が届ける美しい一篇と思う。

二位二点 「大根の二短調」

(本田 圭子)

作者は、ことばから余計な重力を取り除こうとしているのだろうか。読んでみると、こちらの気分がだんだん浮き立ってくる。

春昼やなみなみと注ぐダーズリン マニキュアの十指に桜吹雪かな うららかや手帳に挟む水の音

どの句も何か特別な意味があるわけではない。一句目、香りのよい紅茶を「なみなみと注ぐ」、その行為が「春昼」の気分と程よく釣り合っている。二句目、「細雪」の二ページに紛れ込ませたいような、あでやかで鮮やかな一句。三句目、手帳に何かを挟むという句はことさら新しいものではないが、それが春の水音となれば、読み手はうれしい。

プリントが破れるほどに消して夏 問いの脇に答えを書くテスト用紙のようなプリントを想像した。「破れる程に消」すのは、どの答えも間違っているような、核心に触れ得ないような苛立ちだろうか。しかし局面は「夏」で見事に切り替わるのだ。満天の下町老いて夜業の灯

軽やかなステップが続く中に、そと置かれた一句。誰にでも伝わり共感を得やすい作品と思う。

大根がほどよく煮える二短調

草花や野菜、森の樹々たちもよく音楽に反応すると聞く。二短調と言えば、シヨパンのピアノ曲などは、鍋の中の大根を美味しくしそうだ。遊び心いっぱいの一語を最後に置いて、一篇の印象を深くしている。

四位点 「平和へ」 (白土 正江)

「平和へ」というタイトルの通り、戦いの絶えることのない地球を憂う気持ち素直に表出した大切にした作品抄である。

風光る石仏の手に塩むすび

虎落笛平和のきしむ音かしら

十二月八日両手につつむ膝頭

等、歩いた道を振りかえり振りかえり作句しているような、つつましい

佇まいの作者像が浮かんでくる。

一句目、「塩むすび」の幹旋がみごとで、「石仏」を身近な祈りの対象として紙面に刻み付けている。二

句目、虎落笛の句はとても多いが

「平和のきしむ音」として捉えたところが素晴らしいと思う。三句目、

「十二月八日」もよく目にするテーマであるが、「両手につつむ膝頭」

の内省的な下句で余韻を深くしていると思う。

首ひとつ賭けてたかう冬の蟻 最後にすごい句を置いている。蟻

は顎が強いと聞いたことがある。それが「首ひとつ」なのだろうか。「冬の蟻」は、互いに満身創痍なのかもしれない。いずれにしても、生き延びるためのギリギリのたたかいである。翻って人間はどうなのか、と投げかけているのだろうか。

四位二点 「コスモスの空」

(小野みち子)

作者の現在だいまの日々の暮しが、そのままふるさとの日月につながっているような、大きな安心感の中で書かれた作品抄と思う。

寝ころばせてがさきとねじり花

母が来て色なき風の中にいる

土用干し祖母の確かな手で畳む

どの句も現在形で書かれている。母も祖母も、いつも作者の傍らに居るのだ。

はつたいを練ってやっぱり姉が好き

「やっぱり」が良い位置で役目を果たしている。「はつたい」「練つ

て」「やっぱり」の畳みかけるような語調も、姉に甘える妹の姿を思わ

せ面白く新鮮である。



浜木綿の影まで白きわが母郷  
浜木綿の白さに体中で浸っている  
ような、幸福感あふれる一句。「母郷」が示す、出自への感謝や誇りも感じられ、心に残る。

規模の大小にかかわらず、何かの

## 譲れない父子の関係

一位五点 父（吾亦紅）

・冬の雨濡らして上がる父の墓  
冬の雨に始まり、冬の雲で締めくくられている。作者のお父さんとの生活がドラマチックに伝わって来た。中でも

・植木市父と来ていた肩車  
・認知症この世に父の冬帽子

・父の血を濃く引き継ぎ冬田打つ  
など、題に「父」だけ用いたことに一層父子との関係を他に譲れない重さを感じました。この作品は、どれも定型で、季重ねもなく基本型を崩さず、それに加え実体験、色、音、香りが表現されている。作句の姿に共鳴しました。

・冬の雲父のその後を聞いてみる

一位四点 わたしだけ（陣野千恵子）

賞に応募するのは勇気が要る。今回の十二編の応募作品には、私より年上と思しき方のものもあつた。それは、年々挑戦の気持ち薄れていく私に大きな力をくださった。心よりお礼を申し上げます。

## 河野 則子

「わたしだけ」の世界から手と手との繋がりを見せてくる俳句です。

この作者のユーモラスで楽しい生活感のある作句が多かつた。中でも次の三つが心に残つた。

・ほんとうは雨の嫌いな雨蛙  
・結局は最初にもどる蟻の列  
・大根を炊いて勝氣の母がいる

三位二点 夢二の女（鎌倉真由美）  
梅どきは夢二の女が抜けてくる

## 平易な言葉で深い内容 上田たかし

一位五点 夢二の女（鎌倉真由美）

いずれも格調高くまとめられており、読者を惹きつける。使用されていることばは平易だが、内容は濃いものが詰まっている。心に迷いが無いから、句が生きている。タイトルの

この作品を読み終つた時、ふつと別の世界にすい込まれていくのをおぼえました。句群全体が、私を少女時代へタイムスリップさせ春酔を感じた作品群でした。

・背徳の柚子湯に白き胸放つ  
・いつまでも甘え上手な秋桜  
・寒紅や耳たぶだけがまだ熱い  
・愛のない風船だからすぐ逃げる

四位二点 自由という身

（佐々木 玉）

・はかりごと考えている小判草  
・声帯を固く閉ざして蚯蚓鳴く  
・これ以上嘘はつけない烏瓜

五位一点 マスカットの余白

（神 慶子）

・さえずりの中洗濯もの乾く  
・マスカット胸の余白を埋めてみる

表記も良い。次の句が印象に残る

稲刈のたかぶり解かずしまい風呂  
駄菓子屋の奥に住みつく風車  
愛のない風船だからすぐ逃げる  
梅どきは夢二の女が抜けてくる

一位四点 わたしだけ（陣野千恵子）

思い切つた表現に作者の強い意志が見える。どの句からも読後の快い気分が残る。タイトルのひらがな表記も良い。次の句に惹かれた。

夏帽子お下がりのなのはわたしだけ  
露の臺のなかの産声聞いている  
アクセルをグイと踏み込み冬に入る

三位二点 平和へ（白土 正江）

どの句からも平和に対する強い意志が伝わって来る。戦に対する怒りと反省が読者の心を揺さぶる。心に残る句として、

野兎の瞳がうるむウクライナ  
私の目は節穴でした敗戦忌  
虎落魚平和のきしむ音かしら

四位一点 大根の二短調

（本田 圭子）

タイトルの表記に惹かれた。音程の変化と大根の煮の關係に、作者の視野の広さを感じた。印象に残つた句として、

菜の花のメールは文語体がいい  
うららかや手帳に挟む水の音  
ポケットは混み合ってます秋の雲

五位一点 自由という身

（佐々木 玉）

タイトルに親近感をもった。内容の豊富さと表記のやさしさが光る。次の句にひかれた。声帯を固く閉ざして蚯蚓鳴くこれ以上嘘はつけない烏瓜浮雲や吐き出している春愁い

選外の作品にも惹かれる句が多かった。実力は拮抗しているのでぜひまたチャレンジしてほしい。父(吾亦紅)

どの句からも父への思いが強く伝わって来る。若干、句にバラツキがあるのが惜しい。

心の鏡(大神 愛子)

生活の実感を素直に表現しているところは素晴らしい。句の説明に流れているところがあつて惜しい。

菊日和(原田 勝子)

適度な生活感があり内容も分かりやすい。書かれている情景の奥に作者の思いをどう表現するかがこれらの課題。

秋の書道展(安森 範明)

分かりやすい表現に重点が置かれている。内面描写をもう少し意識すると飛躍できると思う。

雉子車(牧野 桂二)

童話の里のタイトルに惹かれた。生きてゆく苦しみをいろんな角度から表現しておられる。ムツチャン像と童話の里の表示が印象に残る。

コスモスの空(小野みち子)

やさしい表現で読者の心を捉えるものがある。もう少し展開し説明的な内容を省けばさらに飛躍できると思う。次回を期待。

マスクットの余白(神 慶子)

作者の視点には独特で揺るぎないものがある。そこに好感が持てた。次回作を見たい作者である。

## 第26回大分県現代俳句協会賞Ⅱ作品募集Ⅱ

### 〈応募要項〉

応募資格…県協会員であること

(同賞受賞者は除く)

作品…20句一組(一人一編)

タイトルを付加すること。令和4年11月と令和5年10月の作品。既発表、未発表は問わない)

応募用紙…横方向縦書きのA4原稿

用紙使用のこと(ワープロもこれに準ずる)。誰でも読める字で書き、右の欄外にタイトル、左の欄外に氏名(俳号)を明記する。

締切…10月末日(消印有効)

応募料…2千円・必ず作品に同封すること

送り先…事務局(足立)宛て

選考委員…河野輝暉、谷川彰啓、有村王志(選考委員長)、上田たか

大分県現代俳句協会賞は、県協会の目指す俳句の方向性を内外に示すとともに、県協会の質的向上をはかる目的で制定されています。これまでに26名の受賞者を輩出しています。

この賞の意義は、単に応募者の実力試しの場であるというだけでなく、協会内での俳句研鑽の気運を高めることにあります。とりわけ平成30年の28回総会以来、県協会あげての会員拡大運動が始まり、新会員の比率がすでに半数に高まっています。協会内での研鑽、幹部の養成という課題は喫緊のものになっていきます。

県協会第30回総会では「ベテラン作家のいぶし銀のような作品だけでなく、より今日的な若い感覚の俳句も歓迎したい」と呼びかけています。前回25回の応募者も、半数が新人

でした。私にはまだ早い、と躊躇する必要はありません。多くの一流の先生方に自作の20句を丁寧に見てもらえるチャンスはそんなにあることではありません。応募すること自体が俳句の勉強です。見ているだけと、実際に参加するのでは雲泥の差があります。授賞することだけが協会賞の意義ではありません。またこれは「協会を大きくし、協会の影響力を高める」という県協会の方針にも合致します。

ベテランの方も新人の方も、俳句上達の最も確かな方法の一つに協会賞があるということをしつかりと位置づけてほしいと願っています。以下の要領で第26回大分県現代俳句協会賞を募集します。多くの方のご応募を心から期待します。

し、河野則子、伊藤利恵、中山宙虫

**注意事項**…作品は一句一句の出来映えの他に、20句一組のタイトルを含んだ完成度も選考の対象になります。

・応募後の訂正には応じられませんが、返却はしないので、必要ならコピーを取ってください。

・選考は、公平を期すために作者

名を伏せ、活字化して選者に渡します。活字化の際は十分注意しますが、難読・癖字が原因による誤字は、応募者の責任とします。

・令和4年11月〜令和5年10月の作品に限るという規定は、少しでも違反すると失格になるというほど厳密なものではありませんが、著しい違反は減点になります。

・すでに評価の定まった作品（大

きな大会の上位入賞句等）の応募は違反ではありませんが、選者を試すようなマナー違反と捉えられることがあります。著しい場合は減点の対象になります。

全ての点に共通しますが、狭い協会内の応募ですから、事務局は一編一編を注意して扱います。多少のことには臨機応変に対応しますので遠慮なく相談ください。

さて、

## 年間一句賞に足立町子さん（令和四年度）

年間一句賞は、その年度の第一回雑詠句会（三句）、第二回雑詠句会（三句）、自選作品（四句）の中から、特別選者が当協会作品として最もふさわしい一句を推薦するものです。今回は偶然にも両特別選者から足立町子氏の作品が推薦されました。なお、特別選者の成清正之顧問は逝去、谷川彰啓顧問は辞退しました。次回からの特別選者には瀬川剛一副会長、河野則子副会長が加わります。（本年總會決定）

【有村王志会長 推薦】

【河野輝暉顧問 推薦】

開墾の父を眠らす冬の雨

足立 町子

花の雲旅立つときは杖捨てて

足立 町子

教育された。

古代インドの来世観は地獄を含めて六道の苦界が待っていると言つて六道の旅路は柱とも杖とも頼む、杖が必要とされ、昔は棺内に杖と死

出の旅銭を鼻紙に包んで納棺して

いた風景を、子供心に思い出す。

掲句はそんな際に「杖は不要」と意外性を發揮したので衝撃的だったのだ。

意外性は既成の観念に驚きを与え、

考えさせる。そこが他の芸術にも共通のチャームポイントではないか。

杖捨てて、は如何に杖が必要であるかを反転して反語的に表現したオキシロモン（反語的修辞法）とも言え興味深い。

私事になるが、私の次男が芭蕉と同じ五十一歳で選句の「花の雲」の時節に急逝した。足の不具合で家の内外で杖をついた生活だった。杖が要ると言う息子に、古ぼけて玄關の隅にあつた杖を手渡した時の嬉しそうな笑顔が、遺囑を負う度に今となっては淋しい顔になって浮かぶ。

そうだ、やはり逆縁の息子は輪廻転生して、後発の思想である極楽浄土へ「杖捨て」四月十日「花の雲」に「サッサと歩きだした」（百十三江氏句評）のは確かである。

小乗仏教観から解放された町子俳句は、子を亡くした親の私にも安堵になった。

鑑賞者の体験に重層したこの俳句の深奥の俳句なのに、何と平明で爽快で、故にどこか楽天的なユーモアさえ醸している作者の仕掛け力、暖かい人柄を思う時、短詩の不思議を示す佳什だと思つて止まない。

戦後 全国各地で田畑の開墾が行われ、その父の背中を見て育った世代のしみじみとしたその思い。すでに故人となった父への様々な想いが交差して、しとしとと降る冷涼とした時代を超えた思いが伝わってくる。

下五の、杖捨てて、に違和感を覚え、あれッ、と感じた。死後の行き先は宗教に依つて異なるが、先ずは地獄を想像する。子供の時、親から「嘘をつくると地獄に落ちて閻魔王から舌を抜かれるよ」と脅かされて

# 田原千暉俳句大賞（大会一席） 北九州市・山本悦子さん

## 第33回 大分県現代俳句大会

5月14日（日）、大分県アートプラザ研修室で「第33回大分県現代俳句大会」が開催されました。

コロナ禍の影響で、有人で大会を開くのは3年ぶりです。会場のアートプラザには県内外からのべ60人が集まりました。当協会のイベント初参加の人も15人にのぼり、有意義な大会になりました。



有村会長から賞状を受け取る山本悦子氏

この大会は、大分県、大分市、大分市教育委員会、大分県議会、大分県議会、大分合同新聞社、NHK大分放送局、OBS大分放送、TOSテレビ大分、OAB大分朝日放送の10団体から後援を受けています。大会当日までの取り組みは以下の通りです。

- ・ 2月16日～3月31日 俳句作品募集（394句集まる）
- ・ 4月1日～4月30日 作品を選考に送り選考（20句選）
- ・ 5月1日～5月10日 選考にもとづき、会長と事務局で各賞決定
- ・ 5月14日 アートプラザで大会・各賞発表と表彰（60名参加）

大会は足立攝幹事長の司会で始まり、河野則子副会長の開会のことば、有村王志会長の挨拶のあと、九重町の桐野力氏が6月10日（土）に開催

予定の「第20回県協会吟行俳句大会 in ここのえ」の概要を発表しました。続いて大会は「好句検証」に移りました。これは新会員が増えている協会の現状の中で、選句の基準をどこに置くのか、選んだ作品のどこがどう良かったのかを新会員に分かりやすく説明するためのものです。

好句検証は、河野輝暉顧問、有村王志会長、河野則子副会長、足立攝幹事長の4名がそれぞれ3～4作品を取りあげ、スライドを使って深く解説しました。初めての試みでしたが参加者からは「おもしろかった」「現代俳句の奥深さが分かった気がする」「県協会の本気度が伝わった」との声が聞かれ、好評でした。次は表彰式です。昨年から制定された「田原千暉俳句大賞（大会第一席）」は、福岡県の山本悦子さんが受賞しました。山本さんは受賞のため北九州から駆けつけました。



受賞句は全部で41作品で、大会に参加できなかった人については、後日事務局が自宅宛に配送しました。また応募者全員に全投句作品と受賞句の載った冊子が配られました。有村王志会長の講評のあと、上田たかし副会長が閉会のあいさつを行い、定刻に大会は終了しました。

【田原千暉俳句大賞（大会一席）】  
手に余るものみな捨てて日向ぼこ

北九州市 山本 悦子

【大分県知事賞】

四捨五入して春愁を切りすてる

豊後大野市 足立 町子

【大分市長賞】

うぬぼれを落して冬の山となる

九重町 時松由美子

【大分県現代俳句大会賞】

露の葦少女するりと脱皮する

豊後大野市 鎌倉真由美

【大分市教育委員会賞】

人類の出自は同じところてん

大分市 田中 充

【大分県現代俳句協会会長賞】

白菜を二つに割れば笑い出す

国東市 河野 則子

【大分市議会賞】

半生を書いては消して月おぼろ

九重町 甲斐加代子

【大分県議会賞】

にんげんに慣れた花から散ってゆく

大分市 谷川 彰啓

【大分合同新聞社賞】

セーターを解けば近づく過去のあり

大分市 本田 圭子



会場・アートプラザ

【OBS大分放送賞】

春昼の底に鎖で繋がれる

豊後大野市 足立 攝

今生のうすうす見えて霾れり

大分市 後藤 史子

【TOSテレビ大分賞】

本音まだ言えぬつくしが立っている

豊後大野市 上田たかし

【OAB大分朝日放送賞】

葉ぼたんの渦がゆるんでゆく曇明け

大分市 赤峯 友子

【大会秀逸賞】（3名）

祖母の背や水の音ほど暖かし

（大学一年）香川県 合田 陸人

田を植えて母乳じんじん呑む眼

竹田市 有村 王志

三・一一記憶の底にある灯り

九重町 幸谷 恵子

【大会優秀賞】（10名）

まんさくの花の誤解を風が解く

国東市 吾亦 紅

縄電車渡ってみたい虹の橋

佐伯市 御手洗豊海

ギットンが小鹿田の春を埋めつくす

九重町 林 香澄

水打って一息分の風が立つ

大分市 有永真理子

卒業は常に学びの始発駅

大分市 首藤 勇二

草笛のはじめは母郷匂い立つ

大分市 菅 攝子

父を呼ぶ子の変声期鳥渡る

別府市 吉永 徳江

手のひらに乗せて遊ばす春の海

別府市 衝藤美美代

おひさまに春を前借りさんぽ道

豊後大野市 岡村 君香

父がいて母がいた日や梅一月

大分市 川西 達子

# 『季語の呪縛』

顧問・河野輝暉

「五月の俳句会の兼題は菜の花ですが、その頃はもう散っているのに他に取更えてください」という国東句会会員の要求に戸惑った。これでは作句は季語の奴隷ではないかと。大分県現代俳句協会の会報123号では連載俳句講座の第1回として「季語について」を特集している。その中で有村王志宏会長は金子兜太の言葉を引用しこう書いている――

「季語は俳句の約束であるから、これの入らないものは俳句に非ずと言われている。しかしそれは堅すぎると思う。季語の良さを知った上で、季語に拘束されない俳句の展開を期待している」

また同じテーマで伊藤利恵氏は「季語は絶対必要とは思わないけれど季語を学ぶことは人生を豊かにすること」と味な事を述べている。

「季語」という呼称は明治四一年大須賀乙字が初めて使ったという。(諸説あり) 作句の指導書も、この句は無季だ、とか季重ねだ等と鬼の首でも取った様に指摘する。季語の肯定を知った上で、同時にその副作用があり陥穽が潜んでいることに用心せねばならぬ、と言いたい。

先の兼題、菜の花が五月には無くなるから取り下げよ、は自由な文芸に遊ぶ世界にまで、まるで三月末の固定資産税を納入せねば罰金をとるといわんばかりの固定観念が侵入している様だ。

菜の花は歌謡曲にも歌われており、国東市の市花であり、国東町総合文化祭のオープニングで輪になって踊る曲詩は「豊の海原菜の花明かり」がイントロである。他に菜の花は蕪村の名句もある等、極めて身近でポピュラーな花だ。実物が眼前にないと作句が出来ないのか、作句してはいけないのか。犬猫にも少しは想像力があるのではないか。

俳句は新聞記事ではない。事実を基底に文学的想像力を加えて創造し、風韻を余す。花を見て花吹雪、雪を見て風花の様に常在四季であるべき。以上の指導責任はブーメランの様に私に戻る。

あらたふと青葉若葉の日の光 芭蕉

芭蕉について同行した門弟、曾良の旅日記によると「四月朔美、前夜ヨリ小雨ス。終日曇」とある。日の光は無い。また四月に青葉若葉とは時季少早であろう。これは日光東照

宮のご神徳を敬拝する心の真実を吐露したものである。 「今の写生風の作句法とは違い、決して不自然なことではなかった」と楸邨は擁護している。芭蕉は支考を通して「俳諧といふは別の事なし、上手に迂詐(嘘)をつく事也」と唱え、坪内稔典氏は「嘘は俳句の初め」とオキシロモン風に発言しているのは面白い。

## 閑話休題

句会々員の家を訪れた時の話。今時珍らしい風鈴が骨董然と軒にぶら下っていた。それも寒九の一月にでもある。四季に敏感であるべき人の何とだらしく大様なことかと思った。

相手と風鈴を話題にして、私は腰砕けになった。「風鈴の俳句がなかなか出来ずにいて、出来る迄わざと吊しているのです」と当人は苦笑。

自分にこれ程までに俳句に拘わる努力をした事があったか。彼女の作句への根性と熱愛を悟って、よいエピソードが出来たと嬉しかった。勿論、写俳、というジャンルもあり俳句と撮影とは瞬間即興の共通点が特性としてあるとは承知の上。だがこの健気さは俳句が恵む幸福ではないかと思つた。風鈴のことがきっかけで思い出す事があった。



枯れ枝に鳥のとまりたるや秋の暮

芭蕉

この句は「東日記」に出ていて芭蕉が37歳の時。その後「曠野」には

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮

芭蕉

と推敲がなされており、その時芭

蕉は46歳であるから、約十年の鳥鬼が匆匆と流れている。一句完成へ至るまでの俳聖にして自己添削の永い執念には驚愕を禁じ得ない。季語は佳什のツール（道具）に過ぎない。

風流の初めや軒の風鈴冬

輝暉

# リレーエッセイ 連載 ⑩ 「私と俳句」 陣野千恵子

俳句といえは、松尾芭蕉とか小林一茶・正岡子規などの俳人が詠んだ句で、五七五の十七音で表し、季語を必ず入れないといけないというくらしいの知識がありませんでした。

六年前、仕事で知り合った稲田久

美子さんから、「俳句はあなたに絶対合うと思う」と何度も強く勧められました。句会を体験してみることにになりました。それが狩野句会で、7句出したの11句選句でした。様子を見せていただいて、私には到底できそうにないと感じつつも、心の奥では俳句を作ってみたいという気持ちが膨らんできました。

心の声に素直になり、思いきって狩野句会に入らせていただいて暫くは、7句投句・11句選句というルールがかなり負担に感じました。また、句会の日には別の用事が重なることもあり、やはり無理ではないかと思うこともありました。

足立さんに相談すると「あまり窮

屈に考えると続かないから、もっと軽い気持ちで良いですよ」との温かいアドバイスをいただき、肩の力が抜けて楽になりました。

もともと私には、草花や昆虫などに心惹かれるところがありました。冬になり植物は枯れてしまうのに、春が近くなると、少しずつ息を吹き返すように色づいて野山が賑やかになってきます。そうすると、私も何やらわくわくしてきて、気が付いたら五七五と指を折っていました。

私を慈しみ育ててくれた親や、愛おしい家族、恩師、友人などがかけがえのない人たち、そして四季折々の草花や虫、鳥たちが俳句の題材になります。

十七音に思いを込めながら、そして言いたいことをそのまま言ってしまうように気を付けて句を作っています。「説明にならないように……」〇〇とは、もともとそういうものですよ。「欲張りすぎています。材料を整理して簡潔に」などのアドバイスをいただくと、霧が晴れてすっきりします。

それから歳時記を開くと、こんな表現があったのかと驚く事が多く、繊細で情緒ある文化や日常の細々とした事柄に触れ、改めて日本に生ま

れて良かったと思います。

句会に出席して仲間の会員と切磋琢磨することで、少しずつ身につけてきているのではないかと思うことも出てきました。狩野句会や大分県現代俳句の大会などで賞や評をいただくことも少しずつ増えて、とても励みになります。自分の名を探していたりすると嬉しくなります。

また、当然ですが、思うように作品ができないこともあり、夫とお互いの機嫌が悪かったのか、口喧嘩になることもあります。一人で不平を言いながら運転をしていて、急に言葉が降りてくることもあり、慌ててメモにメモします。どうした訳か、諍いをした時の句を作ると、逆に大昔のまだ付き合っていた頃のことを鮮明に甦ってきて、初々しい気持ちで句ができることもあります。

喧嘩はするのですが夫はよき理解者で、私の作品に「映像が浮かばん」とか「説明し過ぎでは」とか「〇〇の方が良くない？」などの意見をくれることもあります。また、東京で生活している長男長女も、家族LINEで送った私の句に感想や意見をくれます。俳句によって家族の絆がいつそう深まってきたように感じ





音無井路十二号分水（竹田市）

ます。

還暦を過ぎてから、私に厄介な持

病があることがわかり、「今したいことをやろう」、「後悔が無いようにしよう」ということをモットーに生活しています。そして心を満たし

てくれることには何にでも首を突っ込んでいます。

委員、ボランティアなどです。今、生かされていて周りのものを見たり聞いたり動けたりしていること、そ

して身の回りの命の輝きに気付けること、自分がいかに恵まれているかということなど本当に感謝の日々です。

皆様これからもよろしくお願ひします。

協会本部発行 『現代俳句』 4月号（第688号）掲載

# 水と太陽そして俳句 足立 攝

現代俳句協会発行の機関誌『現代俳句』に、各地区協会が担当する『風土記編』と題するコーナーがあります。令和5年4月号が大分県の担当で、足立攝幹事長執筆の「水と太陽そして俳句」が掲載されました。「現代俳句」誌面の文字数が厳しく制限されているため、掲載の際は大幅な割愛を余儀なくされましたが、今回の再録にあたっては、もとの完全原稿にもどして掲載します。

大分に住んでいると、意外と大分のことを知らないものだ。たいして知りたいとも思わないまま、今日まで生きてきた。いま、初めてそのことに思い至った。

同じ九州でも福岡や鹿児島、熊本、長崎は少し違う。正確な言葉が見当たらないが、どこか自分の体の中にその県の魂の部分があるのだ。自分の県を愛し、自分の県に誇りを持っている。わが県のために尽くしたい、などと本気で思っている。だから同胞意識がとて強いのだ。その点で私はまったく違うと思う。

自分の生活の場である大分県を好きだと思つたことは一度もない。

いやそうではなく、好きか嫌いかの対象で考えたことがないという方が正確だろう。自分の県を誇りに思つたことはないが、かと言って恥ずかしいと思つたこともない。これは私だけの特殊な感じ方ではなく、大方の人がそうなのではあるまいか。確かな根拠はないが、これまでの生活実感の中でそう思う。

さて、大分という地名は「多き田」から転じたというのが最近の定説であるらしい。この名前は明治四年に

政府によって正式に決まった。戦国時代の群雄割拠の時代からの流れで存在した、実に八つの藩が統合して「大分」になったのである。

この人為的な再編成は、大分の中にさまざまな軋轢を抱え込むことになる。何しろ歴史も文化も異なる藩の集合体なのだから、一枚岩になれるはずがない。「利己的で協調性に欠ける」「計算高くケチ」「ずるがしこい」「シャイなくせに排他的」という気風が長い間残り、その性質は「赤猫根性」と呼ばれた。今ではすっかりこの言葉は使われなくなつたので、若い世代は知らない人が多いかもれない。しかしこの赤猫根性は、大分県を知る上でのキーポイントになると私は思っている。

たとえば当時の平松守彦知事が一九八〇年からすすめた『一村一品運動』がある。県下の市町村がそれぞれ一つの特産品を育てようというものだが、お互いにいがみ合い、打ち勝とうとする県民性をうまく利用した方策だったと思う。これが全国の村起こし、地域活性化運動のさきがけとなった。

赤猫根性は、良いか悪いかという道徳的問題ではなく、現実として大分県民の精神構造として存在し、薄





国宝・白杵石仏

分が住みよいという。「移住におすすめの小規模地方都市ランキング」では一位豊後高田市、二位日田市、三位臼杵市と、全国のトップ3を大分県が独占している。

海の幸、山の幸が豊富でしかも美しい。新しもの好きなので、流行には敏感である。猫のおもちゃになりさがってはいても、ルンバを置いてある家庭が多い。臼杵の磨崖仏、富貴寺、宇佐神宮と国宝の史跡が三つもある。別府温泉をはじめとする源泉総数と温泉湧出量は日本一である。トンネル総数も日本一であるし、世界一の大きさの醸造用木樽もある。

これはギネスにも認定されたそうだ。かぼすの生産量はぶつちぎりの日本一であるし、干し椎茸の生産量も日本一だ。鳥天と鶏唐揚げを明確に区別する食文化を持ち、鶏肉の消費量も日本一だ。七島藺（しちとうい）という草の生産量も日本一。パエリアには欠かせないサフランの生産量も日本一だ。

大分県の県庁所在地は大分市で、ここには大分川、大野川という一級河川が二つも通っている。どちらも水質は上々で大分の水道水は美味いと評判である。他県が水不足になるときも、大分は平気であることが多い。



面子寺

い。いたるところに湧水が湧き、名水の誉れが高い。南国の太陽は春夏秋冬さまざまな表情を投げかけてきて、季節が穏やかである。ひとこと言いつて「水と太陽の恵みの県」だと心底思うのである。

さて、大分県における俳句人物伝であるが、大分に初めて俳句を伝えた人は必ずいるはずだ。その人の弟子、またその弟子と、本気で系譜を辿りながら調べていけば、いつかは到達できるかも知れないが、それはこの稿の目的ではない。ここでは私の知る範囲のことを書きたいと思う。

以下は敬称略でお許し願いたい。

まず、何と言つても田原千暉である。九州における現代俳句の基礎は彼が作ったといつても過言ではない。のみならず主宰した「石」は、金子兜太をはじめ全国の俳人に影響を与え続けた。

### 落書きに芽の出るような妻と十年

(田原千暉)

千暉の初期の頃の作品である。畑でもプランターでもよいが、種まきのあとはまだかまたかと芽が出るのを待つものである。そのような思いで、借家の壁の落書きを愛おしむように見つけたのである。落書きから芽は出ないけれども、貧しくても充実した妻との十年の暮らしがあった。小津安二郎映画のような味わいを感じさせてくれる作品で、私に俳句の可能性を教えてくれた。

続いて足立雅泉。県現俳協の二代目会長で私の父親である。私はこの父の介護のために妻と俳句を始めた。星の深さに二階層低し夜業終ふ

(足立雅泉)

大分県が新産都計画で日本製鉄な

くなつてきてはいるか、まだしばらくは存在し続けるだろう。県は「大分県まち・ひと・しごと創生本部」を起ち上げたが、この舵取りの根底に赤猫根性が横たわっているのは間違いないところである。私が積極的に「愛県精神」を持ってないでいることの背後にも、それはあるかも知れない。

積極的に大分が好きではないといつても、そこは自分の故郷である。故郷への思いは人や景色、風土風習と結びついてそれなりに強いものがあ

る。他県から来た人は、例外なく大

どの工業誘致を始めたのが昭和三十四年以降である。それまでの産業は中小零細企業がほとんどで、掲句のような町工場がいたるところにあった。そこで働く貧しい人々を、自分の痛みとして捉えるやさしいまなざしが雅泉にはあった。

成清正之。県現俳協の三代目会長である。私が俳句をはじめた頃、主宰する俳句道場「雲」に誘ってくれた。私の現在があるのは全てこの師のおかげである。

まだ風になれぬ少年青野にいる

(成清 正之)

正之は誰にも分かる言葉つかいで、深い意味を込めることができる優れた特性を持っている。掲句は亡くなった少年がまだ今生に未練があるのか、青野から旅立てずにいる、そんな想像をして胸が熱くなる作品である。

河野輝暉。県現俳協の四代目会長である。大分合同新聞の俳句選者を千暉から引継ぎ、各俳句会の代表を歴任した。俳句の指導手腕には定評がある。

雑煮食うも骨をひつうも箸の国

(河野 輝暉)

第五十回現代俳句全国大会で大会賞を授賞した作品である。正月の雑煮を食べるときも、火葬場の骨上げのときも等しく箸を使用する。古事記にある豊葦原瑞穂国とはまさしくこの日本の国であり、稲作こそが日本の根幹である。ああ、箸の文化の国、すばらしきわが祖国よ、という日本賛歌がテーマである。俳句はかくも壮大な世界観も表現する。

県現俳協の現在の会長が有村王志だ。七代目に当たる。王志を含めここにあげた五人がすべて何らかの形で田原千暉の影響を受けていることは極めて象徴的だ。

見えぬ海と見える放棄田春落日

(有村 王志)

過疎化は大分県にかかわらず現代日本の病巣のひとつである。地方自治と農林漁業への無策とも言える政府の政策がもたらした要素が大きいからだ。私の小学校の時代は、県の内陸部で海を見たことがないという生徒が多数いた。きびしい労働に従事する人間と自然の関係を、抑制の効いた抒情で描写する手腕は王志独特のものである。

最後に瀬川剛一。県現俳協の副会長であり、私と同じく成清正之に師事してきた。一貫して水郷日田で活躍している。

底霧や妻には別のバスが来る

(瀬川 剛一)

底霧は日田盆地特有の現象で、街が霧にすっぽりと覆われてしまう。その霧の下の生活にあつて、妻には

## 「現代俳句大分」第六集 完成

大分県現代俳句協会では、平成八年を第一回として、おおむね五年に一度を目処に会員の近作を収録した

私とは違う別のバスが来るというのだ。終焉の際に乗るバスであろうか。長年連れ合い、支え合ってはきても、またまた互いに知らない別の顔を持っている。その別の顔がある日、予期しないときに垣間見ってしまうこともある。「別のバスが来る」の措辞にはっとさせられる。

(了)

合同句集を発行してきました。

このほどその第六集が完成し、七月三十日付で参加者に頒布されました。合同句集には応募66名が参加し、各人自選の近作20句と2000字程度の近況、所属結社や句会、それに顔写真が載っています。参加者の半数はこの五年間に入会した新会員でした。また巻末には足立攝幹事長執筆のこの五年間の活動報告、各種資料や協会の規約等が掲載されています。

装丁は、平成八年の第一回のをリスペクトし、表紙の紙質や書体にこだわりました。

わずかに余部がありますので、希望者には送料込みの一冊千円でお届けします。事務局へご連絡ください。



# 《新入会のみなさん》

※心から歓迎します。

山口 雀昭 (山形県)

確かなる竿の手応え鮎開き

川西 達子 (大分)

父がいて母がいた日や梅 月

有永真理子 (大分)

水打って一息分の風が立つ

高橋 玲子 (大分)

桜咲くさりとひとつ年を取り

石橋紀公子 (大分)

春立つや大縄跳びの「もう一回」

赤峯 友子 (大分)

さくらさくら言葉にならぬ真昼時

国廣 精一 (国東)

三陸の重機せわしき枯野かな

立花真由美 (豊後高田)

読みさしの行間埋める夜蛙

天田 泉美 (宇佐)

虹色のしゃぼん玉追う小さな手

佐藤 律子 (大分)

余寒なほ一日二合の米を研ぐ

生野 義晴 (大分)

蓮池の旅情に酔えり一人旅

佐藤八千子 (九重)

年ごとに減らす憂いや大根漬け

高倉 直人 (九重)

影薄きまめお重の指定席

佐藤 次江 (九重)

冬晴や空にきこりの声響く

時松ヤスコ (九重)

雲一片鳥のたわむる夏初め

原 春蘭 (東京)

万緑を額に閉じ込め露天風呂

富田 一主 (九重)

万作の揺れて替え歌口ずさむ

吉光 好美 (九重)

水仙花そつぽ向いてる君がいる

竹尾きくみ (九重)

新葉や腰を下ろして見る夕焼

三橋 光枝 (神奈川県)

秋晴やつうだらだつたといふ娘

内田トシ子 (九重)

鉄線花京の都の衣かな

後藤 洋子 (豊後大野)

いぬふぐりティンカーベルの星の数

赤嶺 広史 (大分)

言葉短き八月の置き手紙

清家 元幸 (大分)

朝日浴び残雪光る由布の山

河野 洋子 (中津)

春一番地球の表側に吹く

羽田野唯信 (豊後大野)

寒椿しつかり顔で道を染む

藤沢 昌由 (九重)

露を煮て蓋ばかり取る妻は留守

竹尾 友彦 (九重)

好きな歌口笛にして昭和の日

志賀 文子 (九重)

終活や母の単衣の花もよう

## 周

第7号 2025



当協会の横山康夫氏が編集する俳誌「周」の第7号。令和5年5月に発行された。会員11名の自選作品(各10句)と、エッセー、書評、作品集と内容が充実していて、しかもレベルが高い。

書評では、横山康夫氏が仁平勝氏の句集「デルボーの人」を取りあげていて興味をひかれた。タイトルは「力まず自在」。仁平氏の前回の句集(13年前)と比べて作品が「巧まない」感じを受けた横山氏が、そこから考察を巡らすのであるが、それがそのまま「仁平勝論」になっている。一氣に読まされてしまう。

「周」についての問い合わせは、協会事務局まで。

春まだき流れて浸すたなごころ

戸板流れて補陀落詣ほしいまま

流水と父の異聞と寄せきたる

漕ぎゆくは父のまぼろし沖おぼろ

(横山氏作・編集部抄出)



前回紹介の8号から、順調に発行を続けて、9号(冬号・1月1日発行)、10号(春号・4月1日発行)、11号(夏号・7月1日号)と、ついに二桁に突入した。中山宙虫氏が会長を務める「罪罪Ⅱ(ネクスト)」である。到るところに前会長星永文夫氏のリスペクトがあつて好感が持たれる。鑑賞から、句評、添削までを宙虫氏が行っていて、統一感のある俳誌になっている。頒布価格は一冊千円。希望者は協会事務局まで。ふくろうと過ごす柵のない通夜かさぶたに触れる風音を焼く

春銀河樹液に明日が阻まれる  
(宙虫氏作・編集部抄出)

### 《退会（逝去含む）》

甲斐 順子

（1月16日逝去・享年82歳）

西峯 峰子（1月20日付け）

本庄 正克（1月22日付け）

灘波 瑞枝（2月13日付け）

吉原 恵秋

（昨年8月末逝去・享年72歳）

### 《受賞》

第17回角川全国俳句大会・準賞

別火して神になる日や祭笛

（福田 英子）

第70回長崎原爆忌俳句大会・優秀賞

一匹の蟻が出てくる戦士の墓

（河野 則子）

## 句会探訪 ⑮

### 川添俳句教室

平成20年6月、川添公民館主催の高齢者大学で、「俳句の今昔」というテーマの講演会が開かれた。この時講師に招いたのが当時の大分県現代俳句協会会長の成清正之氏である。この講演により俳句の気運が一気に高まり、同年9月から公民館の主催事業として成清先生の「川添俳句教室」が発足した。メンバーのほとんどは地域の初心者である。毎月第3木曜、2句出し、全員互選、高得点から順に検討と



である赤峯友子氏が中心となって運営を続けている。いう形でスタートした。これは現在も変わっていない。おもしろいのは高得点を集めた作品が必ずしも先生の評価が高いとは限らないことである。逆に0点の作品が成清先生の優秀賞一席になることもある。メンバーは俳句の良し悪しは多数決で決まらないこと、書かれています。この裏側の思いを感じ取ることの大切さを学んでいった。5年に1度の合同句集も現在第3集が計画されている。成清先生逝去のあとは、先生の長女

第17回平和・九条俳句大会

大会賞（吾 亦 紅）

八月の水飲みに来る影法師

大分合同新聞社賞（由布 晃）

一面の野に地雷なし土筆摘む

入選（園田 武子）

教科書にゲンの名のなきヒロシマ忌

### 県協会主催の「勉強句会」を、六年ぶりに再開します

平成29年から休止していた勉強句会を復活します。今回は初学の方、および初学ではないがもう一度俳句の基礎を固めたいと考えている方を対象にします。（同封の案内参照）  
◎令和5年9月30日（土）13時  
◎コンパルホール304会議室  
◎参加希望者は9月15日までに自作2句をお送りください（季節自由）  
◎会員と、会員紹介の非会員は無料

### 《国東句会が合同句集を発行》



国東俳句会（河野輝暉会長）は、このほど二十周年を記念する第一合同句集

「余白の歌」を発行しました。同句集には会員18名の作品（各15句）が収められており、当協会の有村王志会長が祝辞を送っています。

※発展基金は次号で紹介します。  
※近く成清正之顧問、河野泉さんの追悼を特集します。関係が深かった方からの原稿を募集します。

令和五年八月三十一日発行  
会報第百二十八・九号会員併号  
発行人・有村 王志  
発行所・大分県現代俳句協会  
編集人・足立 攝

## 大分県現代俳句協会

OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION

会長 有村 王志

### 《事務局》

〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436

足立 攝 方

TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481

URL: <http://gendaihaiku.net>

E-Mail: [info@gendaihaiku.net](mailto:info@gendaihaiku.net)

